

## 水田用除草剤の四半世紀

P C P 除草剤が本格的に普及に移されたのは、昭和35～36年の頃であった。当時の水田用除草剤と言えば、2,4 P A くらいであったが、ノビエを枯らす除草剤として脚光を浴びて登場したものである。農作業のなかでも最も厳しい田の草取りが省ける除草剤としてもてはやされ、官民挙げて普及に取り組んだ時代であった。

ところが、このP C P 除草剤は、単に炎天下の田の草取りから農家を解放しただけではなかった。除草作業の省力化は、その後の機械化と相俟って、余った労働力が都市部に流れ、40年代の高度成長時代を支える重要な役割を果たすとともに、本格的な農家の兼業化を促したのである。数百年來の田の草取りの歴史を、ほんの四半世紀前に変えた一除草剤は、その後より優れた幾多の除草剤に置き換わり、農作業の省力化を担っている。ちなみに、この四半世紀の間に、水田用除草剤の価格がどう変わったかを調べてみた。昭和38年のP C P 粒剤の末端価格が、10a 当り290円であった。昭和60年の一発処理剤の平均価格は、約2,900円であり10倍になっている。

さて、P C P 除草剤が上市されて間もなく誕生した日本植物調節剤研究協会が、その後の除草剤の発展に尽くした功績は、ここで触れるまでもない。今後の四半世紀の農業は、また除草剤は、どう変わっていくのであろうか。日本植物調節剤研究協会ならびに関係者の役割は、益々重要なものとなってくるであろう。

〔財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事 増淵保二〕  
〔保土谷化学工業株式会社 農業部長〕

## 目 次

(第20巻第5号)

|                                       |    |
|---------------------------------------|----|
| 除草剤開発におけるバイオテクノロジー利用の現状……………          | 2  |
| ＜神戸大学農学部教授 松中昭一＞                      |    |
| 1. 微生物源農薬の場合……………                     | 2  |
| 2. 雑草の生物的防除におけるバイオテク……………             | 3  |
| 3. 除草剤抵抗性作物の育種……………                   | 3  |
| そ の 他……………                            | 6  |
| てん菜の根中糖分向上について……………                   | 6  |
| ＜北海道立十勝農試 野村信史＞                       |    |
| は じ め に……………                          | 6  |
| 1. てん菜生産の現状……………                      | 7  |
| 2. てん菜の品種と根中糖分……………                   | 7  |
| 3. てん菜の施肥量と根中糖分……………                  | 8  |
| 4. 栽植密度と根中糖分……………                     | 9  |
| 5. てん菜の根中糖分と生育調節剤……………                | 9  |
| お わ り に……………                          | 10 |
| 世界の農耕地雑草とその調査研究(11)<br>——ガガイモ科——…………… | 10 |
| ＜宇都宮大学 竹松哲夫・一前宣正＞                     |    |
| 昭和60年度秋冬作芝生関係除草剤・<br>生育調節剤試験成績概要…………… | 16 |
| ＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞                    |    |
| 新登録除草剤一覧……………                         | 19 |
| ＜農林水産省農蚕園芸局植物防疫課＞                     |    |
| 新登録植物成長調整剤一覧……………                     | 27 |
| ＜農林水産省農蚕園芸局植物防疫課＞                     |    |